

ソーブワーたちをめぐるオーラル・ヒストリー
—— セーンウィー小史へ向けた覚書き ——

飯 島 明 子*

An Oral History Approach to a Sawbwa Family's Strategy:
Research Notes for a Short History of Hsenwi

IJIMA Akiko*

Until April 1959, when the Tai (*Burmese*: Shan) chiefs relinquished their hereditary rights, these chiefs, called *saopha* or *sawbwa* in Burmese, administered the principalities which made up the Shan State of Burma (Myanmar). One major Tai principality, North Hsenwi, was created by the British colonial administration in March 1888 through the splitting of Hsenwi state, which had a long and legendary history. Khun Sang Tun Hung, *sawbwa* of the newly created North Hsenwi, was a usurper of humble origin who established a firm basis for the power of his family which expanded by plural marriages. The present research project explored various aspects of North Hsenwi under the rule of the Khun Sang Tun Hung family through interviews with local people and people related to the *sawbwa* family. The following findings are set out in this paper. Sawbwa Sao Hom Hpa (1901–63), who succeeded in 1925, was a familiar figure for local people who rendered service to the *sawbwa* in many ways. The Kachin people were no exception; in fact, some Kachin were his most loyal and close attendants. The Buddhist element introduced by Khun Sang Tun Hung was distinguishably *Yuan*, which originated in today's northern Thailand, and in certain monasteries in today's Hsenwi, the *Yuan* Buddhist practice of chanting and writing are still adhered to. The last point attests to the hitherto neglected trans-Salween traffic. It suggests that further research into the history of Hsenwi should be undertaken within a broader trans-national perspective.

Keywords: oral history, *saopha* or *sawbwa*, Shan State(s), (North) Hsenwi, polygyny, Kachin, *Yuan* Buddhism, *lik yon*

キーワード: オーラルヒストリー, ソーブワ, シャン州 / シャン・ステーツ, セーンウィー, 一夫多妻, カチン人, ユアン仏教, リック・ヨン (=タム文字)

は じ め に

中国西南部から東南アジア大陸部北部にかけて 13 世紀頃から展開したタイ (Tai) 系首長たちの支配する大小の国家群は、中国・ビルマ・シャム・ベトナムの諸王朝の興亡の間にあっ

* 天理大学国際文化学部; Faculty of International Culture Studies, Tenri University, Somano-uchi 1050, Tenri City, Nara 632-8510, Japan
e-mail: a-ijima@sta.tenri-u.ac.jp

て、それらと抗争、連衡、従属など、さまざまな関係を取り結びつつ盛衰したが、19世紀に本格化した西洋列強の進出を契機として、この地域に近代的領域統治が開始されると、近代諸国家に吸収、統合されながら姿を消していった。

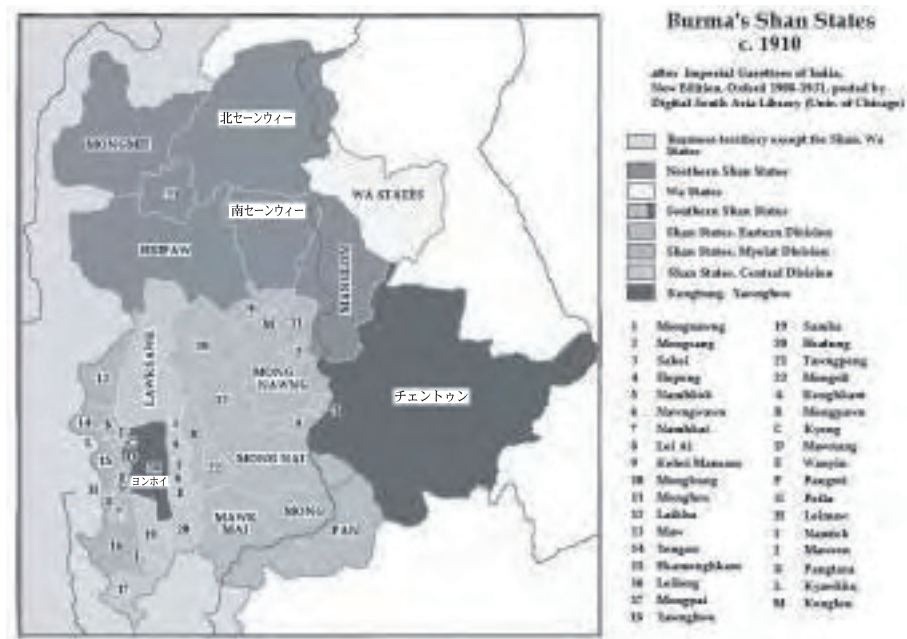
そうしたなかで、イギリスが植民地支配したビルマにおいては、タイ系首長（ツァオパー saopha; *Burm. sawbwa*）たちの支配域が植民地政府により間接統治地域（シャン・ステーツ Shan States）として再編されて、¹⁾ 新たに画定された各領域を管することとなった旧首長層が温存された。²⁾ その結果、ビルマ語音に由来するソーブワールの名で呼ばれたタイ系首長の権威は縮小しつつも、³⁾ 1962年3月のネーウィンによるクーデターを契機に最終的に剥奪されるまで、消滅することはなかった。しかし20世紀半ばまで存続したソーブワール支配の実態がいかなるものであったかについては、イギリス植民地当局者たちが寄せた関心以上の研究が行われることはなく、ほとんど手つかずとなっている。1962年以降の軍事政権下のビルマ（ミャンマー）において、この地域の歴史に関する新たな情報は乏しく、調査も困難であることが研究を阻害してきた要因と言えるであろう。わずかに、ビルマ国外に居住するソーブワール関係者の著作や回想録などによって窺い知られるという状況が続いている。⁴⁾

本稿の記述の中核を成すのは、共同研究課題「ミャンマー少数民族地域における生態利用と世帯戦略」の下に、「シャン州におけるオーラル・ヒストリーの収集」という題目で筆者が分担し、ビルマ・北部シャン州のセーンウィー（Hsenwi; *Burm. Theinni*）⁵⁾ を中心に行ったフィー

- 1) 今日のシャン州（Shan State）にあたる。シャン州はビルマ（ミャンマー）東部の高原地帯を占める最大の州で、ビルマ語で「シャン Shan」と呼ばれるタイ系民族（自称は「タイ Tai」）をはじめとする「少数民族」が住民の多数を占める。ビルマ王朝時代、この地域にはタイ系民族を主体とする小国が多数あって、世襲の首長がビルマ王朝と従属的關係をもちつつ支配していた。その数は、1886年にコンバウン朝ビルマを滅ぼしたイギリスがこの地域の併合を開始した時点で30を越えた（「ソーブワール」より下位の「ミョーザ」「グエコンム」が治めるクニを含む）。
- 2) イギリスは当初首長たちの地位を「ソーブワール職（sawbwaship）」として認証して、間接統治を行った。その統治権は、サナート（注14）において定められ、イギリスの調停により画定された地理的行政区域を越えるものではない。本稿ではかかる意味で、植民地化以降に関する記述に関しては、「ソーブワール」の呼称を使用する。
- 3) 1922年10月にシャン連邦（Federated Shan States）制度が導入されて、ソーブワールたちは立法権のない諮問会議（Advisory Council）の構成員となり、公共工事・森林・農業・医療・教育・衛生などの分野が植民地ビルマを代表するコミッショナーが統括する連邦に移権され、各ソーブワールの権限は縮小した〔RG, April 2, 1923〕。ビルマ独立後も継承されたソーブワールの世襲統治権力は、1959年4月にソーブワールたちがシャン州政府との協定に署名することにより放棄されたが、「ソーブワール」のタイトル、ホー（御殿）や私産は維持され、補償金が支払われた。
- 4) Chao Tzang Yawng hwe [1987], Elliott [1999] 以外の刊行物として、Inge Sargent, *Twilight over Burma: My Life as a Shan Princess*, University of Hawaii Press, 1994; Nel Adams, *My Vanished World*, 2000 [ネル・アダムズ, 2002, 『消え去った世界——あるシャン藩王女の個人史』森博行(訳). 東京: 文芸社; Sao Sanda, *The Moon Princes: Memories of the Shan States*. Bangkok: River Books, 2008] がある。BL. OIOL. Mss Eur/C 709 は、南セーンウィー（MongYai）の王女の回想録である。
- 5) 現在の行政区域としては、ラーショー県テイニー市（Theinni Myo, Lashio Khayaing）。



地図1 シャーン州地図



地図2 1910年頃のシャーン・ステーツ

ルド調査⁶⁾の成果の一部である。かつてセーンウィーを王都として広域を支配したソーブワーの一族をめぐる歴史を明らかにすることを所期の目的としたが、ソーブワーの親族や直接関係者のみならず、ソーブワー支配下の地域社会で生活したさまざまな人々にインタビューすることにより、できるだけ多角的な情報を収集するよう努めた。上述の研究状況を鑑みると、これまで行われていない当該地域におけるインタビュー調査を限定的ながらも行うことは、タイ系首長を戴いた小国家の歴史の諸側面への新しいアプローチの試みともなっている。

今日インタビューで収集できるセーンウィーに関するオーラル・ヒストリーは、概ねツァオ・ホームパ（Sao Hom Hpa）がソーブワーであった時代（1925～59）について語られる。この時代は太平洋戦争をはさむ。「ビルマ公路」（いわゆる「援蒋ルート」）の起点ラーショーの北方約50キロメートルの公路上に位置するセーンウィーは、戦争中の一時期（1942/11/25～1943/9/25）、日本軍に占領された。したがって、多くのインタビューで日本軍に関する記憶も語られたが、それらについては別稿を期したい。地域の人々と日本軍との関係はどうであれ、日本軍が居たことによりセーンウィーはアメリカ軍の標的となって空爆を受け、ソーブワーの館（ホー Haw）（写真1）などが破壊された。

また調査の過程では文字記録や画像の有無にも注意を払ったところ、インタビューの機会を通じて、インフォーマントから個人的に種々の貴重な資料の提供を受けた（未刊文献Aを参照）。なかでも二つのシャン語/シャン文字手稿、「クンサントゥンフン（Khun Sang Tun Hung）王の歴史」⁷⁾ および「伝統薬書」に



写真1 ホー

レンガ造りで、町の背後の山腹にあった。ツァオ・ホームパはここに住み、執務した。空爆によって破壊され、現在は繁茂する樹木や雑草に埋もれて、朽ちた柱のみ残る。
出所：セーンウィー・ホー所蔵

6) 調査日程と調査地は次のとおりである。

- 1) 2005年1月3～13日 ラーショー・セーンウィー
- 2) 2005年8月22～31日 ラーショー・チェンマイ
- 3) 2006年2月17～26日 ラーショー・セーンウィー
- 4) 2006年8月25日～9月2日 ヤンゴン・チェンマイ
- 5) 2007年2月17～27日 ラーショー・セーンウィー・クッカイ

セーンウィー地区への入境にはビルマ政府の許可を要し、ライセンスを有するプロのガイドの同行が条件となっている。そのために、1)では、U Soe Min氏（SEAMEO CHAT—当時）にヤンゴンから、また、3)、5)では、タウンジー在住のガイド、Nang Mo Kham氏にマンダレーから同行していただいた。以上5回の他に、2003年1月にセーンウィーとラーショーで予備的調査を行っている。

7) クンサントゥンフンは後述のように、最後のセーンウィー王朝の祖。「歴史」は、クンサントゥンフ

付記された「セーンウィー年誌」⁸⁾（いずれも仮題）は歴史史料としてきわめて有用である。これらの取り扱いについては慎重を期して、内容に踏み込む詳しい検討は後考に委ねることとし、本稿では、「クンサントゥンフン王の歴史」の一部を成す「系図」（写真2）のみを参照する。

なお、人名は適宜、実名またはイニシャル等で記す。また、タイ語等のローマ字表記は、基本ラテン文字の範囲内で発音に近づける場合と先例や慣用に従う場合とがある。

1. クンサントゥンフン王に至るセーンウィー略史

タイ諸語で書かれた年代記類によって語られるセーンウィーの歴史は神話的物語に遡るが、遅くとも13世紀後半から15世紀半ばまでマオ河（Nam Mao; シュエリー河；瑞麗江）流域に栄えたタイ人の王国ムンマーオと同じくコーサンピー（Kawsampi）の古名をもつことから、ムンマーオと密接な関係を有したと推定される。ムンマーオ王国が解体した明代以降については中国史料に現れる「木邦」に比定され、明朝によって宣慰使が任命される一方、ビルマ王朝の介入も始まり、18世紀半ばにはビルマ王により首長が擁立されていたことが知られる〔GUBSS. Pt. II, Vol. 1: 184〕。⁹⁾

セーンウィーの核心域はトゥ河（Nam Tu）流域の平地で、都は元々この河の南側に在ったが、19世紀末には河の北岸近くに位置した。¹⁰⁾ 盛時のセーンウィーの支配域は広く、都の北方に連なる山地を囲みつつ、マオ河が北側の境界の一部を形作った。他の所では境界はそれほど明確に定まっていなかったが、後の英領時代の南・北セーンウィー地域を中心に、Kehsi Mansam, Mong Hsu, Mong Sang, Mon Nawng 及びサルウィン河の東側諸国におよぶ影響力を有した模様である。しかし19世紀末のイギリスによるシャン諸国併合時には、世紀の半ば以来の覇権争いの渦中で分裂状態にあった。その経緯は概略次のようである。

1852年に王位に就いた Seng Naw Pa が大臣とその7人の息子を殺害すると、モーガウンに逃れた大臣の孫 Sang Hai¹¹⁾ との争いが起こった。Sang Hai はモーガウンでカチン人と結び、1858年、カチン軍とともにセーンウィーに戻って、Seng Naw Pa をビルマへ追いやった。Sang Hai は1年間治めた後、幼い息子 Khun Yi に譲位するが、実権は部下で女婿のクンサン

フンの孫にあたる John Hpa 氏（注50）参照）所蔵。氏によれば、父ツァオ・ホームパの遺品に含まれていたものである。

8) S. T. A. 氏（セーンウィー在住、1940年頃セーンウィー生まれの男性）所蔵。伝統薬医であった氏の祖父、U Wanna (c. 1870–1955) が書き残したもの。年誌の記述は1895年から1943年に至る。

9) 「セーンウィー年代記」の一写本によれば、ビルマ暦1086年（c. 1724 A.D.）に、ビルマ王はセーンウィー王であった夫を殺害した女性にセーンウィーの統治を命じた〔新谷2003: 288〕。

10) 都の立地は、水はけがよくないにも拘わらず、占星術師の判断を仰いだ結果だとされる〔Cochrane 1915: 137–138〕。

11) シャムのチェントゥン攻撃（1850～54年の間に3回）を退ける際の軍功で頭角を現したとされる〔Chao Tzang Yawngghwe 1987: 225; GUBSS. Pt. I, Vol. 1: 297〕。

トゥンフン (Khun Sang Tun Hung) に移った [GUBSS. Pt. II. Vol. 1: 184]。¹²⁾

旧王 Seng Naw Pa の息子 Naw Mong はマンドレーに捕らわれていたが、マンドレー陥落

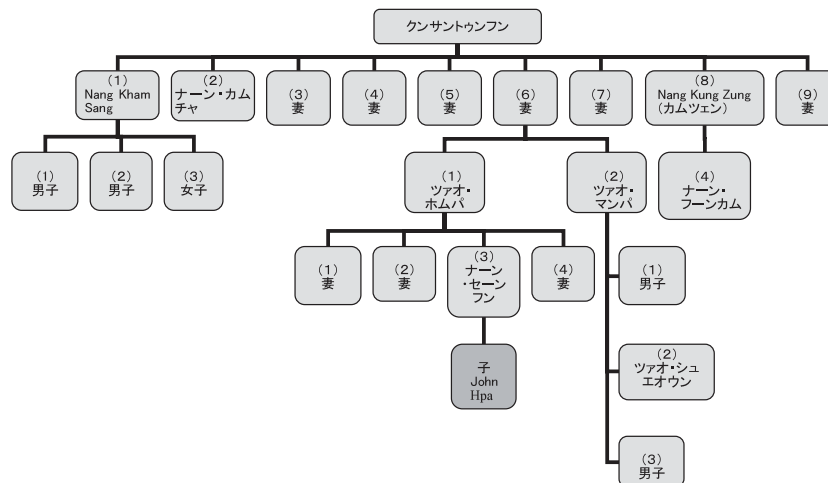


写真2 「系図」

最上段中央がクンサントゥンフン、上から2段目は9人の妻たち（左から(1)～(9)の数字がふってある）、3段目は各妻とクンサントゥンフンとの間の子供たちである。(6)の妻との間の子が、(1) ツァオ・ホームパと(2) ツァオ・マンパ。ツァオ・ホームパの下に線で結ばれた4段目にはツァオ・ホームパの妻たちが4人示され、(3)の妻の下に John Hpa 氏の呼称である Sao Lun Kop Kin が青色インクで書き足されている。

出所：[YKSTH]

12) [GUBSS. Pt. I, Vol. 1: 297-298] は、年代も含めて、やや異なる経緯を語る。主な相違は、ビルマ王朝の介入について詳しい点であるが、ここでは煩雑になるので省略した。但し、旧ソーブワー権力の背後にはビルマ王朝があったのに対して、クンサントゥンフンはビルマ王朝支配の外部から台頭し、ビルマ王権に敵対したことを確認しておく必要があろう。

により自由の身となり、1887年初頭、ビルマ王朝官憲撤退後のラーショーを占拠した。クンサントゥンフンはこれをシャン人、カチン人、パラウン人の兵力で破り、Mong Si¹³⁾に逃げた Naw Mong をさらに8,000人の兵で追撃した。1887年7月、クンサントゥンフン軍は15,000人に膨らみ、翌月ムンヤイ (Mong Yai) を占拠することにより、セーンウィーの支配権をほぼ手中に収めた [GUBSS. Pt. II, Vol. 1: 185-186; Sao Saimong Mangrai 1965: 125-126]。

1888年1月、イギリス軍がセーンウィーの町に到ったとき、軍事的に勝利したクンサントゥンフンが都の主として迎えた [Sao Saimong Mangrai 1965: 156ff]。戦乱によって破壊された当時のセーンウィーは町とは名ばかりの「数個の村の集まり」でしかなく見え、クンサントゥンフンの「御殿 (palace)」も簡素な家にすぎなかった。しかし定期市の市場はタイ人とカチン人に中国人がちらほら混じる大勢の人々で賑わい、地場産の野菜などとともにマンチェスター綿布や中国製靴などが売られていた様子を、イギリス軍を率いたダリー (H. Daly) 中尉が記している。同年3月、イギリス当局が招集したムンヤイにおける会議で南・北セーンウィーの分割が決定され、クンサントゥンフンに面積も人口もはるかに勝る北部の、Naw Mong に南部の、ソーブワーとしての統治権を付与するサナート (Sanad)¹⁴⁾ と任命書が渡された。本稿が扱うのは、この分割によって成立した北セーンウィーである (以下、特に断らないかぎり、「セーンウィー」は北セーンウィーを指す) (地図2参照)。

1889年、クンサントゥンフンは Sang Hai の娘の一人である妻¹⁵⁾をホーから追った。姉への仕打ちに怒った¹⁶⁾弟の Khun Yi はカチン人の下に逃げて挙兵するが、ラーショーから来た英

13) リーチ (E. R. Leach) は、セーンウィーの支配権をめぐる相争った諸派が共に、カチン人の支援を受けていた点に着目している。カチン、シャン、パラウン、中国人から成る約1万2千人の人口を支配した Mong Si のカチン人首長は、一貫して旧王方に付いた [Leach 1954: 225]。別の箇所では、両派がカチン人の「傭兵 (mercenaries)」を用いたとしている [ibid.: 243]。カチン人との関係については、第3節で述べる。

14) 英インド総督が承認し、ビルマ主席弁務官が定めるところの諸条件 (毎年一定額の貢納など) の下での自治を認める内容をもつ書式 [Sao Saimong Mangrai 1965: xxxi-xxxii]。ムンヤイ会議でソーブワーたちが申請し、合意された貢納額は北セーンウィーが Rs. 2,000、南セーンウィーが Rs. 15,000 だった。「貢納額の大きさは重税を意味した」ので、住民たちにとって、貢納額の多寡は「ソーブワーが臣民の利益を保護する能力」を示すと解された。当時のクンサントゥンフンの「prestige が非常に高かった」ため、イギリス当局はクンサントゥンフンによる低い提示額を認めて争いを避けるのを得策と考えた [ibid.: 160]。

15) GUBSS [Pt II, Vol. 1: 186] には、「Sang Hai の娘」とだけあるが、この時追われたのはクンサントゥンフンが娶った Sang Hai の娘の三姉妹のうちの長姉 (「系図」の妻 (1), Nang Kham Sang) であろう。Pu Loi Tun [n.d.: 22] によれば、放擲は一時的であった。クンサントゥンフンと Nang Kham Sang の間の娘を母方の祖母とする N. K. Y. 氏 (セーンウィー在住、1953年生まれ) の女性、父は Mangshi (芒市) のソーブワー、母方の祖父は Yingjiang (盈江) のソーブワーは、「離婚した」と語る [2005年1月6日、2007年2月24日]。なお、Gengma (耿馬) のソーブワーの一族もセーンウィーに来て、ソーブワーに許されて屋敷を構えていた [2003年1月3日]。雲南地域との交流も検討課題である。

16) Pu Loi Tun [n.d.: 19-21] は Khun Yi の挙兵の理由を、クンサントゥンフンによって「正統な」権力を奪われたと考えて、セーンウィーの支配権の分与を要求したとしている。

軍の攻撃を受けて殺された。その後、1892～93年のカチン人の乱（後述）を除き、平和が保たれたが、引き続いた戦乱の間に人口は激減していた。ラーショー平野だけで70,000人あったと推定される人口〔GUBSS. Pt. II, Vol. 1: 186-187〕は、1900年頃、北セーンウィー全体で118,000人（1,500村）とされている〔*ibid.*: 181〕。

2. ツァオパーあるいはソーブワーの家政と治政

1) クンサントゥンフンの時代

本稿の対象であるセーンウィー王一族の歴史は、クンサントゥンフン（1852～1915）に始まる。上述のように、クンサントゥンフンはそれまでの王の家系を破って権力を掌握した、いわば篡奪者である。軍事的な勝利者として立った時、おりしもビルマ全域の植民地支配を開始しようとしていたイギリスと遭遇して投降し、イギリス人によって「ソーブワー」としての地位を認証され、正統性を付与された。イギリス当局の観察では、クンサントゥンフンはイギリス政府への従属を「好ましくあらざる必要」として受け入れていたが、外国人（西洋人）は須く嫌っていた〔BL. OIOL. Mss Eur/F 278/103: 3〕。

クンサントゥンフンには、「系図」に記載されているだけでも、9人の妻がいた。¹⁷⁾このような多妻は、タイ王たちにあってはむしろ通常のことであった。リーチ（E. R. Leach）はタイ王たちの「際だった一夫多妻（polygyny）」慣行を、「システムの重要な部分」ととし、様々な身分の娘たちを妻として王宮に抱えることが、支配域の政治的結束を維持し、王宮内部の対立派閥間の勢力を均衡させるのに役立ったと述べ、これをビルマの王たちの掣みに倣ったと解釈している〔Leach 1954: 215-217〕。

クンサントゥンフンがビルマ王を「理想（ideal）」〔*ibid.*: 215〕の範型としたかどうかには議論の余地があるが、¹⁸⁾出自の低い¹⁹⁾クンサントゥンフンが王位を窺う存在になるうえで、Sang Haiの娘たちを3人までも娶った²⁰⁾ことが、有利に働いたことは確かであろう。いずれにせよ、

17) Conway [2006: 190] は7人、Pu Loi Tun [n.d.: 24] は8人を載せる。

18) クンサントゥンフンはティボー王（最後のビルマ王、在位1878-85）が派遣した役人による授位の誘いを断った〔Caw Yanfa Saenwi 2001: 120〕、また、「王の衣装は自分の身分にそぐわないと言って」固辞した〔Pu Loi Tun n.d.: 17〕、という記述がタイ文献にある。

19) イギリス当局のデータによれば、クンサントゥンフンは西Manglunのトゥンフン村〔名前はこの村名に由来する；tun hung はバンヤンノキ *ficus indica*〕の役人（tamong）の子。伝統ある家系のソーブワーたちからは「成り上がり者の冒険者」と見なされたが、臣下たちからは畏れられ、尊敬されていた〔BL. OIOL. Eur/F 278/103: 3; Eur/F 278/81: 13〕。ワ（Wa）人の血が流れていたという説もある〔GUBSS. Pt. I, Vol. 1: 298〕。タイ語文献には、クンサントゥンフン自身が、「ツァオパーの家系とは無縁の僕」で、幼名はYonkua〔「塩を請う」の意〕、出家時の寺ではKhun Sang Cindaと呼ばれ、後にトゥンフン村に移ったと語った〔Caw Yanfa Saensi 2001: 118-120〕；幼名の謂れは、子供の頃に病弱だったために慣習によって縁者に売られた後、25ヴィスの塩を払って請け戻されたことによる〔Pu Loi Tun n.d.: 12〕、と述べるテキストがある。

20) 「系図」の妻の（1）、（2）、（3）。

ここでは「系図」に妻たちが並べて記載されていること、それにより「系図」が横に大きく広がり、同時に子供たちも記載されて、「系図」上の「世帯」をさらに大きく見せていることに注意したい。

クンサントゥンフンの子供たちのうちでおそらく最も著名なのは、1948年1月に独立を果たしたビルマ連邦の初代国家元首（大統領）となったヨンホイ（Yawnghwe, *Burm. Nyaungshwe*）のソープワー、ツァオ・シュエタイツ（Sao Shwe Thaike 1894-1962）に嫁いだナーン・フーンカム（Nang Hearn Kham）（1915-2003）であろう。彼女は父の死後に誕生した末子で、「系図」上に妻（8）の第四子として記載されている。彼女の回想に基づく記述によれば、母ナーン・カムツェン（「系図」上の表記では Nang Kung Zung）はセーンウィーに属するモンヨー（Mong Yaw）のミョーザ²¹⁾の孫であり、クンサントゥンフンとの結婚は幼時に祖父とセーンウィー王宮から派遣された役人との間で取り決められた縁組み、ないし提携（alliance）であった [Elliott 1999: 33-36]。1937年のナーン・フーンカム自身の結婚はスケールが異なり、兄であるセーンウィーのソープワーに「従属しない」²²⁾ 相手との結婚だったが、やはり政略的であり、夫となる20歳年長のソープワーには既に複数の妻がいた [ibid.: 33-36, 76-83]。セーンウィーとヨンホイ両王家間の婚姻関係は次世代にも結ばれている。²³⁾

クンサントゥンフンの居所はホーカム（Haw Kham 黄金宮）（写真3）と呼ばれ、町（ムン mong, ウェン weng）の中にあつた。建物はイギリス当局がクンサントゥンフンを懐柔するために贈ったものと言われる。²⁴⁾ 現在ホーカムの建物の跡は更地だが、²⁵⁾ 電話局やその従業員宿舎、小学校、農務局事務所、米倉などが建つ広い敷地（ワーン wang）を有する。ソープワーの妻たちと大勢の子供たちがホーカム内で共に生活した。²⁶⁾ ツァオ・ホームパ時代についての証

21) ミョーザはソープワーに直属して、地方のムンを治める役人。1891年の英当局の報告によれば、セーンウィー（及びトーンベン）では民事・刑事の訴訟がソープワーまで上訴されることは稀で、ミョーザたちは一定の税収をソープワーに納める限りにおいて制裁を受けることない、「独立小領主」のようであった [BL. OIOL. Mss Eur/F 278/74: 18]。

22) ナーン・フーンカム自身が結婚相手に求めた条件だったという [Elliott 1999: 78]。

23) ツァオ・シュエタイの息子ツァオ・セーンバとツァオ・マンバの娘ツァオ・シュエオウン（Sao Shwe Ohn）[「系図」でツァオ・マンバの下に書かれた子（2）] が1948年に結婚した。ツァオ・シュエオウン（ヤンゴン在住、1928年セーンウィー生まれ）によれば、セーンウィーではタイ語、カチン語、中国語が話されたが、ヨンホイ王宮ではビルマ語のみが用いられたという著しい違いがあった [2005年2月28日]。

24) S. K. L. 氏（ラーショー在住、1930年セーンウィー生まれの男性）による。ムンクン出身の父方の祖父は、クンサントゥンフン軍の武将。また、夫人の姉は N. M. K. 氏（注27）参照 [2003年1月4日、2005年1月10日、8月24日、2006年2月23日、2007年2月24日]。

25) 1930年代後半にセーンウィーを訪れたコリスは、ツァオ・ホームパの案内で「マンダレー様式」の「旧王宮」を見学している。当時は謁見の間が時々儀式に用いられていただけで、すでに「過去の雰囲気」を漂わせているとコリスは書いている [Collis 1938: 250]。

26) 子供の頃祖父に連れられてホーカムに行った S. K. L. 氏（注24）参照）は、5～6人の妻と10～15人の子供たちがいたという。



写真3 クンサントゥンフンのホーカム（左：遠景；右：模型）

左図の正面入り口の前に見える西側階段（現在も残る）はツァオパーと従者だけが昇降した。

D. S. K. 氏（セーンウィー在住，1936 年生まれの女性，父は中国人・母はタイ人）による [2005 年 1 月 7 日，2006 年 2 月 23 日]。

言から類推すると，妻子以外の人々もホーに住み，²⁷⁾ 敷地内には洗濯係，炊事係，兵士（ムータン mu tham）たちなどが居住する大所帯であった。²⁸⁾ そして祭事の際には，一般の人々もホーに集った。毎年「12 の月」（11 月頃）に催される「ツァオパーに貢ぎ物を奉呈する祭り（ボーイ poy）」の時は，タイ人もコーカン（Kokang）²⁹⁾ 人もカチン人も，それぞれの貢ぎ物を持ってホーを訪れた。貢ぎ物を受け取ったソーブワーは祝福の言葉をかけ，ホーの周りを一周してから，役人たちに分配したという。³⁰⁾

セーンウィーの治安が回復した後，クンサントゥンフンは領内の人々からは徳治者の評判を

27) N. M. K. 氏（ラーショー在住，1919 年セーンウィー生まれの女性，ツァオ・ホームパの妻の一人）によれば，ホーには彼女の姉やツァオ・ホームパの甥を含む 10 人の家族と，地方役人（ミョーザ）の息子や娘たちの計 50 人が住んでいた [2005 年 1 月 6 日，2007 年 2 月 24 日]。John Hpa 氏（注 50）参照）によれば，50, 60 ～ 100 人の人々が「王の世帯」（royal household）を構成していた [2006 年 8 月 27 日]。宿泊者として，ホー内で踊るダンサー（モーカーナージン moka nang ying）もいた。N. L. K. 氏（セーンウィー在住，1951 年ナムカム生まれの女性，父はカチン人・母はタイ人）の母方の叔母はマンダレーの学校で学び，ホー内で踊りを教えるダンサーで，町に家があったが，ホーに寝泊まりすることが多かったという [2005 年 1 月 9 日，2007 年 2 月 20 日]。

28) S. T. A. 氏（注 8）参照）による。1920 年代の南セーンウィーでは，約 65 ヘクタールの敷地をもつホー内の巨大な木造御殿に 15 人の子供たちを含むソーブワーの大家族全員が住み，大勢の従者たちが敷地内の別の一画に住んでいた。ソーブワーの子供たちには銘々の乳母がつき，乳母に伴われなければホーの外に出ることは許されなかったという [BL. OIOL. Mss Eur/C 709]。

29) コーカンはシャン州の東北辺に位置するサルウィン河と中国国境に挟まれた地域。16 世紀から漢人が移住し，17 世紀以降ヤン一族の支配下で自立。19 世紀にはセーンウィーのソーブワーに従属したが，北セーンウィーへの帰属（1947 年に分離）の決定は 1897 年の北京協定による国境の成立に伴う。住民の 90% が漢人。Rettie [2001] を参照。

30) S. T. A. 氏，N. M. K. 氏による。S. T. A. 氏によれば，タイ人は米・野菜・果物・金銭，コーカン人は茶，カチン人は酒・卵を持ってきた。

得た [Pu Loi Tun n.d.: 22]。彼はイギリス当局が勧告する財政改革案に抵抗しながら、直下の領内 6,000 世帯と申告するタイ人住民に課すべき世帯税を免除し、³¹⁾ 大勢の役人を抱えて且つ彼らに高率の歩合を認めていたために、「純粋な慈善家にはふさわしいが、当局が期待する合理的な統治者には不適當な度を超した善意」だと当局者を嘆かせた。その結果、他地域から領内に流入する人口が多く、課税対象世帯の数も把握できないという状況が生まれた。³²⁾

晩年のクンサントゥンフンは仏教信仰に専心した。寺院の建立や布施行為に散財して、³³⁾ 「篤信家 Sasana Tayaka」の名をもって呼ばれた [*loc. cit.*]。クンサントゥンフンは 15 歳で沙弥として出家し、³⁴⁾ 2～3 年間、寺院で教育を受けた。叔父の一人が僧侶で、この叔父の止住する寺がトゥンフン村にあったという。若い頃、クンサントゥンフンはしばしば叔父の下へ赴き、寺院に滞在していた [*ibid.*: 12-13]。また、覇業の途上、伝来の仏像を捜し求め、某寺で発見されるとそれを自分の居所に運ばせて、盛大な祭りを催したという逸話が複数のテキストに載る [*ibid.*: 18; U Kaw Kham n.d.: 18; Caw Yanfa Saensi 2001: 121-122]。これらのことから、クンサントゥンフンが若年から一貫して、仏教に心を寄せていたと考えられよう。その仏教信仰がいかなるものであったかについては、後段で触れる。

今日インタビューからクンサントゥンフンの生前について知るのは難しいが、クンサントゥンフンの死後、玉璽 (スム sum) を預かる筆頭のマハーテーウィー (Mahathewi 太后) であったナーン・カムチャ (「ツァオナーイ・スム」あるいは「ナーン・スムロン」と呼ばれた) [Pu Loi Tun n.d.: 22]³⁵⁾ (写真 4) が、家内の一部を管理していた様が窺われる。たとえばナーン・カムチャの姪を母にもつ女性³⁶⁾は、ナーン・カムチャに招かれて (母を通じて依頼があった)、

31) 1 世帯あたり年額 2 ルピー。イギリス当局は、全カチン人世帯が年額 1 ルピーの税を納めていると述べ、クンサントゥンフンもその事実を認識しているとする [BL. OIOL. Mss Eur/F 278/ 94: By D. Drage, August 1898, Lashio]。また、隣接するスィポー (Hsipaw) の徴税額が 10 ルピーであるにも拘わらず、スィポーからの人口移動は見られないのを怪しんで、住民には税負担能力があり、問題はクンサントゥンフンの金銭感覚にあると推論している [*ibid.*: By D. Drage, October 1898, Lashio]。

32) [BL. OIOL. Mss Eur/F 278/ 94: By D. Drage, August 1898, Lashio]

33) [BL. OIOL. Mss Eur/F 278/ 103: 1]。クンサントゥンフンが後援した事業として、印刷所の設立 (1900 年) もあったとされるが [Sai Kham Mong 2004: 339]、未確認。

34) 名前の「サン」は沙弥としての出家経験者に付けられる敬称。

35) クンサントゥンフンはナーン・カムチャの膝に倒れて息を引き取ったと語られている [Pu Loi Tun comp.: 23]。Elliott [1999: 53] は、クンサントゥンフンがすべての妻を同じに扱い、マハーテーウィーを定めなかったとするが、これは明らかに誤りである。しかしクンサントゥンフンの死後にホーカムで育ったナーン・フンカムの目には妻たちが対等に映り、母の異なる兄弟姉妹たちを含めて「皆がひとつの家族」 [*ibid.*: 56] のようであったのは事実であろう。

36) D. K. M. 氏 (セーンウィー在住、1922 年頃セーンウィー生まれの女性)。D. K. M. 氏の祖父の兄はクンサントゥンフンの徴税官だった。17 歳の時 (1939 年頃)、ツァオ・ホームパの命令でナムカムの看護師養成学校へ送られて看護師となる。のちに産婆の教育も受け、1982 年まで病院勤務を続けた [2006 年 2 月 21 日]。



写真4 クンサントウンフンの死後に残った3人の妻たち

1916年頃、ホーカムの居間で撮影された写真で、左からナーン・カムアイ (Nang Kham Ai)、ナーン・カムチャ (Nang Kham Kya)、ナーン・カムプット (Nang Kham Phut)。前二者はマハーテーウィー、ナーン・カムプットは劣位の後であって、「北の屋敷を持つ(貰った)后」と呼ばれた。前二者はそれぞれ「系図」の(3)と(2)の妻にあたり、Sang Haiの娘たちである。ナーン・カムプットは「系図」の妻(4)にあたる[P. K. M.氏宅所蔵]。

就学後2年間ホー内で生活したが、その間、仏壇に花や水を供える役目を命じられていた。また、縁故のある別の女性³⁷⁾は、同じくナーン・カムチャの依頼で仏像の世話をする係だったと証言している。これらの女性たちは、クンサントウンフンやその妻と何らかの縁を有するものの、必ずしも血縁ではなく、また血縁であっても遠い関係である。晩年のクンサントウンフンの関心からすると、ホー内の仏壇に関わる少女たちの役目は細やかながらも、欠くことのできない重要なものであったと言えるだろう。そしてマハーテーウィーは世帯の外延に目を配りつつ、ソーブワーの遺志を継ぐ生活を営んでいたと推測される。

2) ツァオ・ホームパの時代

1915年にクンサントウンフンが死去すると、ソーブワー位は直ぐに継承されず、空位の間に顧問会議 (Interregnum Councilors) が設けられた。顧問会議は宰相 (アマチョ Amat Kyo) クンコーン (Khun Kong) を議長に5～6名から成り、その中には英政府文官のゴードゥアン (E. T. D. Gaudoin) が含まれた。ゴードゥアンはやがてクンサントウンフンの娘の一人と結婚する。³⁸⁾

1925年にツァオ・ホームパ (1901～63) がソーブワー位に就いた。ツァオ・ホームパがソーブワーとなるにあたっては、植民地当局の意向があったとされる [Elliott 1999: 51, 60]。³⁹⁾ ツァ

37) P. S. K. 氏 (セーンウィー在住, 85歳 [2003年1月インタビュー時。以下、年齢を記す場合は同様の女性])。実母の最初の夫が、クンサントウンフンの妻(1) (注15) を参照) とクンサントウンフンの間の息子ツァオ・クンアイ (「系図」では妻(1)の第一子; 注39) を参照)。母の再婚後の子であるが、子供の頃日常的にホーに出入りしていたという。血のつながりはないが、ナーン・カムチャを「祖母」と呼んでいる [2003年1月3日, 2005年1月9日, 2007年2月23日]。

38) P. K. M. 氏 (ラーショーでツァオ・マンパの旧宅に住む, 1928年チン高地生まれの男性) による。氏の父はゴードゥアン (インド生まれで、両親はフランス人とインド人)、母はクンサントウンフンの娘ナーン・セーンウー (Nang Seng U: 「系図」に妻(4)の第三子として載る) [2007年2月24日]。なお、ゴードゥアンには西洋人の先妻がいて、ゴードゥアンとP. K. M. 氏の母は駆け落ちした [Elliott 1999: 54]。

39) クンサントウンフンが存命中のイギリス当局のデータには、クンサントウンフンの成年に達した二ノ

オ・ホームパはタウンジーのシャン首長学校 (Shan Chiefs School) で教育を受けた後、ビルマ・ライフル銃部隊員として従軍して、イギリス式訓練を受けていた [Nang Myint Yee 1998]。

ツァオ・ホームパが引き継いだセーンウィーはクンサントウンフンの王国とは異なり、すでにシャン連邦 (Federated Shan States) の一部であった。ツァオ・ホームパの事績はいきおいビルマ現代史の変転とリンクしていった。1931年、大農民反乱がシャン地域の一部にもおよび、ビルマ・ナショナリズム運動も高揚するなか、ツァオ・ホームパら4名の若い世代のソーブワーたちは将来のビルマ独立を視野にロンドンの円卓会議に臨み、シャン諸国としてのアピールを試みて挫折する [Elliott 1999: 69-70]。1935年4月にはビルマ統治法が施行されて、ビルマ植民地はインド帝国から分離した直轄植民地「英領ビルマ」となった。日本軍の占領期を経て、1947年2月、ツァオ・ホームパはアウンサンの招集したパンロン会議にシャン代表の1人として出席し、ビルマを管区ビルマ地域とシャン、カレンニー、カチンの辺境地域を合わせた連邦制国家として独立させるという内容の協定 (パンロン協定) の署名者となった。

1949年の拉致事件 (後述) 後はラーショーに移り、ヤンゴンへの転居の誘いを拒んで、首相ウー・ヌがツァオ・ホームパのためにラーショーに設けた特別弁務官職 (無給) に就いた。⁴⁰⁾ 以後、セーンウィーの行政は弟のツァオ・マンパが担ったが、それによってツァオ・ホームパの公務が終わったわけではなかった。1959年にネーウィン首相⁴¹⁾によりシャン州首班 (Head of Shan State) の任を委ねられ、1960年まで務めた。その間の1959年4月、タウンジーで開催されたシャン州会議 (The Shan State Council) の緊急会議に他の32名 (内4名は代理) のソーブワーたちとともに、自らはセーンウィーのソーブワーとシャン州首班の二重の資格で出席した。そしてソーブワーの世襲権力を「人民」すなわちシャン州政府に移譲する協定に、一人目のソーブワーとして署名し、続いて州政府側を代表してソーブワーたちと連署した。⁴²⁾ 1962年3月にネーウィンのクーデターが起こる。シャン州の自治権強化要求の高まりが引き金の一つになったと考えられているが [荻原他 1983: 138]、ツァオ・ホームパは既に病を得て病床にあり、1963年4月に死去した。

以上の経歴において、ツァオ・ホームパが果たした国政・州政レベルの政治的役割についての検討は別稿に譲る。一点だけ指摘しておきたいのは、この間にツァオ・ホームパが極端なビルマ

↙ 人の息子 [「系図」の妻 (1) の子 (1) のクンツァンアイと子 (2) のマハーウォン] が載るが、クンツァンアイは父の不興をかい、マハーウォンは就学中で跡継ぎは決まっていなかった [BL. OIOL Mss Eur/278/103]。

40) S. K. M. 氏, N. M. K. 氏, Dr. K. L. 氏 (注 44) を参照) による。

41) 1958年9月にウー・ヌからネーウィンに政権が委譲され、ネーウィンは1960年4月まで首相の座にあった [荻原他 1983: 127-132]。

42) “Dawn of New Era in the Shan State,” *B.W.B.* 8 (4) (May 21, 1959): 26-39.



写真5 ソーブワーと高官たち

中央の肘掛け椅子に座るのがツァオ・ホームバ（左）とツァオ・マンパ（Kaem Mong [後継者]）（右）。ツァオ・マンパの向かって左が宰相、ツァオ・マンパの右が内務卿（アトゥウェンウン Atwenun）、中列と後列の計6名が大臣（アマジー Amat Kyi）、他に税務官4名、大町長（ミョーザージー Myoza Kyi）3名、警察官1名、書記2名が写る。後列左から2名は職名不明だが、名前からカチン人と中国人、また後列左から3人目の大臣はビルマ人らしい。



写真6 ツァオ・ホームバと下級役人たち

ソーブワーの背後に立つ3人はソーブワー近侍の護衛（*Tai*: khon pai lumla sao pha; *Burm.* apado）であるタイ人。前に座す人々は、各地の町村の長（*Tai*. pu mong pu kae）たち。ベランダにはホー内に住む女性たちが見える [主として P. S. K. 氏による]。

出所：セーンウィー・ホー所蔵

（人）嫌いから親ビルマ（人）に転向したことである。かつてセーンウィーでは人々のロンジー着用を罰したツァオ・ホームバが、自らロンジーをはくようになり、姪の一人のビルマ国軍軍人との結婚を許すなど、その変化は誰の目にも明らかだった。1950年頃に生じたこの変化には、ビルマ国軍軍人チット・ミヤイン（Colonel Chit Myaing）⁴³⁾の感化があったといわれるが、⁴⁴⁾その事情は詳らかではない。この間の経緯については今後の課題としたい。以下の本稿では、インタビュー調査によるオーラル・ヒストリーに基づいて、治下のセーンウィーの人々にとって、ツァオ・ホームバがいかなるソーブワーであったかに焦点を絞って記述する。

セーンウィーのホーに起居していた当時のツァオ・ホームバは、規則正しい生活をおくっていた。毎朝6時頃起床して、9時に執務室に入る前に散歩に出かけた。この散歩はソーブワーとしての仕事の一つで、町の視察が目的だった。数日間かけて町全体を見回り、道路や橋の様子

43) チット・ミヤインについては、1997年にワシントンでなされたインタビューの長文記事がある [http://www.burmadebate.org/burmaView.php?article_id=55&page_no=1-10 2005年12月28日確認；中西嘉宏氏のご教示による]。この中で、チット・ミヤインはアウンサンに率いられた独立闘争期から1967年までの軍人としての公的活動とは別に、私生活では仏教徒として多くの宗教活動を行っており、1956年にラーショーに仏塔を建立したと述べている。1950年代、ラーショーに赴任していた間にツァオ・ホームバと交流があったと思われる。

44) Dr. K. L. 氏（ラーショー在住の医師、1931年チョーメ生まれ、母はシャン人・父はビルマ人）による。Dr. K. L. 氏は1956年にラーショーの市立病院に赴任、当時特別弁務官（のちシャン州首班）としてラーショーに在ったツァオ・ホームバとその死に至るまで親交があった [2005年1月10日、8月24日]。

などを点検した。警察官、ボディガード、そして妻たちも交代で、総計15人位の人々が付き従って歩く姿を町の人々は見ていた。⁴⁵⁾ 午後3時頃に仕事を終え、7時に夕食をとり、10時に就寝した。⁴⁶⁾

ツァオ・ホームパの妻たちについては、インタビュー調査によると、9人まで確認することができる。⁴⁷⁾ また、ツァオ・ホームパが「父と同じ、9人」の妻がいると言うのが常であったとの証言⁴⁸⁾もある。「系図」に載るのは、(1) ツァオ・マラー（スィボーの王女で最初のマハーテーウィーだが、後に離婚。「系図」にある子供たちは養子で、内一人目はツァオ・マンパの子(1)）、(2) ツァオ・ウェンティップ（チェントウンの王女）、(3) ナーン・セーンフン（実子 John Hpa 氏の母）、(4) ナーン・タンジー（カロー出身のビルマ人）の4人だが、他にナムカム出身の女性1人、セーンウィー出身の女性4人（内1人はN.M.K. 氏、もう1人はナーン・セーンフンの姪のナーン・シュエティン）を妻としたようだ。

二人目の妻であるツァオ・ウェンティップはツァオ・ホームパの異母妹ナーン・フーンカムの学友だった。二人が通ったメイミョーの学校（St. Joseph's Convent School）ではフランス人の修道女たちが英語で教育した [Elliott 1999: 59]。セーンウィー訪問時にツァオ・ウェンティップのもてなしを受けたイギリス人コリスは、彼女が正確な英語を話し、「著しく、モダンな世界に属している」という印象を記している [Collis 1938: 230-231]。別の妻はおそらく英語を話さなかったのだろう。コリスは彼女を見かけたただけだった。複数の妻たちはそれぞれの役割をもちながら、同じ館で生活していたと思われる。

ツァオ・ホームパがラーショーへ移った後、⁴⁹⁾ ホー内で共に生活していた妻はナーン・セーンフン、N.M.K. 氏、ナーン・シュエティンの3人である。そこではナーン・セーンフンが客の接待、N.M.K. 氏は中国人・インド人・タイ人の3人のコックが働く厨房を預かるという役割分担があった。⁵⁰⁾ ツァオ・ホームパの死後、3人は遺言に従って、さらに3年間一緒に暮らした

45) S. K. L. 氏による。

46) N. M. K. 氏による。

47) 「系図」に記載されているのは4名である。

48) N. M. Y. 氏（ラーショー在住、1935年セーンウィー生まれの女性）。父がソーブワのマハーテーウィー（「系図」の妻(3)）の兄で、ツァオ・ホームパの信頼が篤く、ラーショーでソーブワの家族と共に暮らしていた。N. M. Y. 氏は、「セーンウィー・ホー」と呼ばれるラーショーのソーブワ旧邸に父の死後の1982年から住み、管理している。1956年に結婚するまでの2年間、ヤンゴン大学で歴史を専攻。『ツァオ・ホームパ略伝』を著している。

49) 1949年の拉致事件以降だが、転居の正確な時期は不明。ツァオ・シュエオウン（注23）参照）によれば、父ツァオ・マンパがツァオ・ホームパに代わってセーンウィーを統治したのは1956～62年2月の間である[2005年2月28日]。また、John Hpa 氏によれば、ラーショーでは「セーンウィー・ホー」が建つまで、「赤い家」と呼ばれた別の家に住んだ。

50) John Hpa 氏（父がツァオ・ホームパ・母がナーン・セーンフン、1946年にナムカムの Dr. Seagrave's Hospital で生まれる）による。氏は12歳でメイミョーの寄宿学校に入り、1960年からオーストラリアに留学、父の死により帰国した後、母（故人）と共に暮らした。幼時のセーンウィーでは、ホー内で大勢の親類や役人の子供たちと遊んだことを記憶している [2006年8月27日]。

後に別れて、それぞれが亡夫から贈られた家に住んだ。⁵¹⁾

このようなツァオ・ホームパの多妻については、批判的な町の声もあった。1人しか妻を持たなかった弟のツァオ・マンパの方を良しとするものだ。⁵²⁾ 人々の記憶に残る最後のソーブワーの姿には、ツァオ・マンパの記憶も含まれている。

人々にとってのソーブワーは、第一に徴税者であった。税額はタイ人の場合、1世帯あたり年に5ピャー (pya=チャット)、後に6ピャーになった。⁵³⁾ 徴収にやって来る役人 (アーコン Akon) を通じて納めるが、人々はソーブワーが税金を集めて、祭りや、寺院や仏像の建立に多額を支出していると考えた。⁵⁴⁾ また、多くの子供たちが、ソーブワーが教育に意を用いているのを知っていた。彼らはソーブワーの設立した学校、コンベント・スクール (Convent School) (写真7) で教育を受けたのである。

コンベント・スクールは、1946年にラーショアの Guardian Angels School の分校としてセーンウィーに開校し、すべての私立学校が閉鎖された1962年まで存続した。ソーブワーが役人たちを使って生徒募集の広告をして、⁵⁵⁾ 開校時に8～9歳だった子供たちが入学した。1学年の生徒数は20～50人だった。⁵⁶⁾ 授業科目は英語、ビルマ語 (ビルマ人教師が1名いた)、数学、一般科学、地理、歴史、衛生、行儀作法など。⁵⁷⁾ ローマン・カトリックのシスターたちが英語を使って教え、⁵⁸⁾ 教員の給料はソーブワーが支出した。生徒にかかる費用 (授業料・食費) は

51) S. K. L. 氏による。

52) D. S. K. 氏による。

53) U. P. 氏 (セーンウィー在住、1928年頃セーンウィー生まれの男性、祖父はインドから道路工事労働者として来たインド人・祖母はマンダレー生まれのビルマ人ムスリム、父は町の中央通りで食料品を営んだ) によれば、中国人を含む外国人世帯の税額は12チャットだった (1948年のビルマ独立後1959年まで) [2006年2月22日]。世帯税の他に田税 (akon na)、多くはないが茶のプランテーションにかかる税があり、Burma Corporation にも課税した [S. K. L. 氏による]。種々の税収を合わせたソーブワーの収入の規模については、1959年4月に世襲統治権放棄に対する補償として支払われた恩給 (pension) とその算出根拠が参考になる。それによると、セーンウィーの場合、過去15年間の歳入の最高額に基づく346万チャット余りと過去15年間の森林使用権料の平均に基づく6万チャット余りの合計、約352万チャットだった。これは34人のソーブワー中、チェントウンのソーブワーに次ぐ二番目の高額で、100万チャット以上は7件にすぎない [B. W. B. (8)4: 38]。

54) S. T. A. 氏による。

55) D. S. K. 氏による。広告は、「子供に英語を習わせたいなら、学校へやるように」という内容だった。U. P. 氏 (注53) 参照) は英語習得を目的に、コンベント・スクールに入学したと語る。

56) D. S. K. 氏、D. N. N. 氏 (注57) 参照)、H. K. 氏 (ヤンゴン在住、1938年セーンウィーの東北方の Ho Mong 生まれの男性、ソーブワーの宰相であったクンコーンの孫の1人) による [2006年2月25日]。

57) D. N. N. 氏 (ヤンゴン在住、1933年セーンウィー生まれの女性、母方の祖父はクンサントウンフンの弟、父方の祖父は様々な職掌でソーブワーに仕えた。同じくソーブワー配下の役人で英語に堪能だった父は、ツァオ・ホームパに委嘱されて、英語の法律をタイ語やビルマ語に翻訳する仕事も行った) による [2004年9月2日、2006年8月26日]。

58) ツァオ・ホームパが招聘したイタリア人の他にカレン人、インド人のシスターがいた [H. K. 氏による]。生徒たちは全員、シスターからクリスチャン・ネームを模した別名を与えられた。それらの別名は現在も通用する。インタビューしたコンベント・スクール出身者の別名には次のようなものがア



写真7 旧コンベント・スクールの校舎
現在は公立小学校となっている[2006年2月筆者撮影]。

一人月額4ないし5チャット,⁵⁹⁾ ナムカム・ムセ・クックイ等から来た寄宿生⁶⁰⁾は30チャットだったが、貧しい生徒をソーブワーが金銭的に援助する場合もあった。⁶¹⁾ ソーブワーは時々学校を視察に来て、生徒たちと言葉を交わし、「必要な物が足りているか」と尋ねたりした。⁶²⁾

調査の過程では、ソーブワーについての記憶を有する実に多くの人々(カチン人を含む)がコンベント・スクール出身者であることに驚かされた。もちろん、立ち寄った通りのソバ屋を営む彼らと同世代の一女性のように、貧しくて

学校には行かなかったという人々も少なくないはずであるが。

ソーブワーはホー内に種々の係の人々を住まわせて日常生活をおくっていたが、ソーブワーとその家族たちの生活はそこで完結していたわけではない。ホーの外の町には、さらにさまざまな形でソーブワーの生活と関わり、サポートする人々がいた。インタビュー調査で得られるそうした町の人々とソーブワーとの関わりを示す証言からは、具体的で、より事細かな生活の一部が垣間見られる。

祖父の代から伝統薬医(モー・ヤー mo ya)⁶³⁾であるS.T.A.氏(注8)参照)の父と、その弟である叔父は、ツァオ・ホームパの侍医だった。侍医は他に2人、計4人いた。ソーブワーが病気になると、役人が呼びに来て、侍医は役人とともにホーへ向かった。1回の往診の報酬は10～16ピャー(ちなみに、侍医の世帯税は免除されていた)。通常は月に4～5回、ソーブワーの健康を伺いにホーへ赴いた。幼かったS.T.A.氏自身は、祭りの時に父に連れられてホーへ行ったこと、父がソーブワーと親しく語り合う間、周りで遊んでいたのを憶えている。そして8歳になると、コンベント・スクールに入り、3年間通った。⁶⁴⁾

ある: Marie, June, Oscar, Frank, Shirley, Lionel (順不同)。

59) D.S.K.氏によれば4チャット, U.P.氏によれば5チャット。

60) H.K.氏によると、寄宿生は20数名いた。

61) ソーブワーが教育費を負担した別の例として、ソーブワーの命でナムカムの看護師養成学校に送られたD.K.M.氏(注36)参照)の場合がある。月額90チャットが支給され、半分が授業料、残りは生活費と小遣いにあてられた。D.K.M.氏とツァオ・ホームパの間に血縁はないが、拡張された「世帯」の一員と言えるかもしれない。しかし同じ条件でナムカムに学んだ少女はD.K.M.氏だけではなかった[2006年2月21日]。

62) D.S.K.氏による。

63) 所謂生薬を扱うが、薬の種類は祖父が15種、父が12種、S.T.A.氏は6種と数が減っている。祖父の手になる「伝統薬書」[U Wanna. n.d.]は、症状に応じた薬の処方方を記したものである。顧客はムンヤイ、ナムサン、ナムカムなどの広域から来る。

64) S.T.A.氏は、町の人々とソーブワーとの関係は格別良好ではなかったという感想も語る。ちなみに

D. S. K. 氏（写真 3 参照）の広東出身の父（c. 1894 ~ 1961）は、6 ~ 7 歳の時にビルマへ来て、ヤンゴンで洋服屋に住み込んで仕立てを習った。ナムサンを経て、セーンウィーへ来てからは、中国人が経営する酒屋に勤めた。店は当時町で唯一の酒屋で、ソーブワーからライセンスを受けて、酒だけでなく、アヘン（ヤー・ラム ya lam）⁶⁵⁾ も商った。さらに、まだ 10 家族以下だった中国人コミュニティのために、あらゆる便宜をはかっていた。D. S. K. 氏の父は傍ら、ソーブワーやその妻たちに頼まれると洋服の仕立てをした。彼らは絹やベルベット等の布地を用意していた。父はホーに呼ばれて採寸し、布地を預かって帰って、家で仕立てた。仕立代はソーブワーから支払われた。D. S. K. 氏も 1946 年から 6 年間、コンベント・スクールに通った。

やはりコンベント・スクール出身者である D. N. N. 氏（注 57）参照）の父方の祖父は、ソーブワーの大臣（アマ Amat）の下で、40 ~ 50 カ村を管轄する役人だった。祖父の家には定期的に村長たち⁶⁶⁾が集まった。後に刑務所（トン thong）の監督官となると、ソーブワーの費用で、囚人たちに食事を提供するのも祖父の仕事だった。食事時間になると、足に鎖をつけた囚人たちが刑務所から歩いて祖父の家まで来て、食事をした。数十人いた囚人には、強盗をはじめとするあらゆる種類の犯罪者が含まれていた。祖父はこうした任務を果たしながら、同時にソーブワーとその家族の使うジュエリーやカトラリー一切を作る職人だった。カフスボタンからカップとソーサーに至るまで、材料はすべて金で、ソーブワーが用意した。ソーブワーは唯一信頼するジュエリー・メーカーとして、彼女の祖父に金を委ねたのである。

祖父たちがソーブワーのために大工や左官の仕事をしたというのは、中央通り⁶⁷⁾で時計修理屋を営むインド人ムスリム男性である。⁶⁸⁾ インド人たちはもともと鉱山労働者として、イギリス人に連れて来られた。⁶⁹⁾ ソーブワーは仕事があると、彼らと呼び、対価は金銭で支払われた。池造りをした年には、税金が免除された。ソーブワーからはさらに土地を与える⁷⁰⁾という申し

に、氏はコンベント・スクールから政府の高校へ進学し、卒業後 30 年間小学校教員として、ビルマ語による教育に携わった経験を有する。現在は伝統医としての仕事とともに、カンマタン寺（後述）の信徒代表（hopao）として活動をしている。

65) コーカンで合法的に生産されたアヘンがラバでセーンウィーに運ばれ、シャン連邦内で消費された。1930 年代の政府データでは、年に 12,000 ヴィス（約 20 トン、1936）のアヘンがコーカンで生産され、内 5,000 ヴィス（1938-39）がセーンウィーの町に到着した [Maule 2002: 210]。

66) ソーブワー支配の基底を構成した村々の長には、村の大きさに応じた三つのランクがあった。小村長がプーケー（Pu Kae）、900 戸位までの大村長がプーカン（Pu Kang）、1,000 戸になるとプーヒン（Pu Hing hing は 1,000 の意）と呼ばれた（S. T. A. 氏による）。1891 年の報告 [BL. OIOL. Mss Eur/F 278/74] によれば、村長がケー、村々の集合体であるムン（ないしモン）の長はミョーザ、ヒン、ターモンと様々に呼ばれ、小さいムンではカン、ユワーオク、ケーとも呼ばれた。

67) 「ビルマ公路」の一部をなした道路が町の西南から東へ向かって走る。市場を中心に両側に商店が立ち並ぶ 200 メートルほどが現在の中央通りである。

68) セーンウィー生まれ、年齢不詳 [2006 年 2 月 20 日]。

69) U. P. 氏（注 53）参照）の祖父のように、「自発的に来た」インド人もいた。

70) 私所有地は無かったとされ [GUBSS. Pt. II, Vol. I: 200]、土地はソーブワーの意のままになったと考

出があったが、7～8家族いたインド人ムスリムたちは、インドへの帰郷を望んでいたのに、辞退した。しかし次の世代になると、礼拝所の土地を借り、後に購入した。現在中央通りの脇に礼拝所があるが、礼拝所が無かった頃は、クッカイやラーショーまで礼拝に出かけていたという。

ソープワーが移住者に土地を与えた例は、コーカン人についても語られる。コーカン人にはソープワーに田畑を支給されて耕す者の他に、使用人としてホー内に住んで働く者があり、その数は100人位に上った。⁷¹⁾

ソープワーの身边にあった人々として特筆すべきは、ボディガード（パイ・ツァオパー phai saopha）である。ボディガードは50～60人いて、多くはタイ人だったが、中にはカチン人もいた。カチン人ボディガードの最後の生き残りという S. H. 氏⁷²⁾によれば、ボディガードは役人によって各村から選ばれたが、カチン人は氏と同村の4人だった。彼らは普段は山の田畑で農耕に従事し、1カ月に10日間位、輪番でボディガードを務めた。当番の連絡には人を寄越す場合も、文書が届けられる場合もあった。文書には、タイ語で何時いつホーカムへ来るようにと書かれ、書記（ツァレー sale）のサインがあった。⁷³⁾ 当番の間はホーのすぐ外側で寝泊まりし、アメリカ製ライフル銃を携行した。食事はソープワーから支給されたが、無償だった。このようにカチン人がソープワーに近侍したのは例外ではなく、むしろ常態であったと見られる。次節では、特にソープワーの信頼を得ていたカチン人について、詳しく述べる。

3. カチン人 [Tai: Khang] との関係

シャン・ステーツ行政を開始したばかりのイギリス植民地当局者はすぐに、セーンウィーの住民の人口構成の特徴を、「著しく混成」であり、「カチン人が優勢」であるととらえた [BL. OIOL. Mss Eur/F 278/74: 8]。⁷⁴⁾ カチン人は主としてトゥ河谷より北方の山地に居住していたとはいえ、必ずしもカチン人だけの集落が形成されていたわけではなく、「きわめて無節操に混住」していた。カチン村にはパラウン人、“ラ”人、ワ人、中国人、さらには少数のタイ人も混

えられる。

71) S. T. A. 氏による。

72) 町から10キロメートルの山地にあるノーン・チョン村生まれ、77歳のカチン人男性。17～18歳の時にソープワーのボディガードを務めたほか、3年間の警察官（バリッ palik; プーハーン phuhan）の経験も有する [2006年2月22日]。

73) タイ語文書によるカチン人への連絡については、注76)を参照。

74) GUBSS は1898年の人口として、総計118,290人中、「シャン」人36%、カチン人31%、パラウン人14%、中国人13%、その他少数民族6%にあたる数値を載せる [GUBSS. Pt. II, Vol. 1: 194-195]。ちなみに、今日のセーンウィー市では、市当局のデータによれば、全人口7万人弱のうち、カチン人人口は「シャン」人65%、ビルマ人7%に継ぐ6%、約4,000人である [Theinni Myo 2004: 5]。但し市役場長の話では、カチン人口は増加傾向にあって約7,000人であり、Nati村など4つの大規模村を数えるという [2005年1月8日]。現在のセーンウィーにおいて15%の多くを占めるのはコーカン人（コーカン地域から来た中国人）である。

じる有様であった [GUBSS. Pt. II, Vol.1: 194]。タイ人の側からすれば、カチン人は常に身近な存在であったといえよう。

クンサントゥンフンの登位に至る覇権争いにおいて、カチン人が重要な役割を果たしたことは、既に指摘されている（注 13）を参照）。セーンウィーを含む北部シャン・ステーツ長官の任をダリーから引き継いだスコット (J. George Scott) は、クンサントゥンフンを勝利者たらしめたのはカチン人たちであり「BL. OIOL. Mss Eur/F 278/81: 13」, 旧ソーブワーやビルマ人と戦うために、セーンウィーにカチン人たちを引き入れたのは、クンサントゥンフんだと記している [ibid.: Mss Eur/F 278/79: 17]。

クンサントゥンフンの登位後に、一部のカチン人たちとの関係が悪化した。スコットの報告によれば、カチン人たちはソーブワーとなったクンサントゥンフンから期待した報償（土地と自治）を与えられなかったばかりでなく、微罪にも厳罰を科され、また隣り合うカチン村とタイ村間のもめ事においても不利な処遇を受けた。不満を募らせたカチン人小首長たちが反乱を企み、1892 年 12 月にセーンウィーを襲った。クンサントゥンフンは一旦ラーショーへ退去したが、ラーショーから軍事警察隊を伴って戻り、以後事態は鎮静化した [ibid.: Mss. Eur/F 278/81]。

事件の詳細を報告⁷⁵⁾したスコットは事態を重くみて、将来に向けた治安対策として、カチン人をソーブワーの管轄からイギリス人の監督下に移すなどのいくつかの方法を提案するが、クンサントゥンフンの承諾するところではなかった。クンサントゥンフンの主張の要点は、自身の任命したカチン人の大首長たちは反乱に加わっておらず、反乱者はカチン人コミュニティの小人たちにすぎないという点にあった。スコットも、カチン人側が一致団結を主張しているにも拘わらず、ソーブワーの役人であるカチン人が反乱している事実はないこと、またカチン人の訴える抑圧や強奪はソーブワーが直接行使したり命令した訳ではなく、配下の者たちが私利を求めて行っていることを認めており [ibid.: Mss Eur/F 278/79: 12-13. APPENDIX XXXVI], 「民族」範疇で対立の図式を描くには無理があった。カチン人は決して一枚岩たりえず、そしてクンサントゥンフンはカチン人を含めた秩序の維持に自信をもっていた模様である。

ソーブワーの身边に常時カチン人がいる状況は、ツァオ・ホームパの時代になっても変わらない。ソーブワーのボディガードの一部がカチン人であったことは既に述べた。

カチン人の多く住むクッカイには、カチン人の知事 (Amat) が置かれ、税の徴収もカチン人の役人があたった。⁷⁶⁾ カチン人知事は、ナムカムなど他の 4 人の地方知事同様、3 月に 1 度、

75) スコットによる詳細な報告は、BL. OIOL: Mss Eur/F 278/79。

76) P. T. T. 氏（セーンウィー在住、1940 年生まれのカチン人男性）による。P. T. T. 氏はムンユーに近い村に生まれたが、10 歳の時親類のいるクッカイに移り、結婚直後の 1967 年にセーンウィーへ来

セーンウィーのホーで開かれる会議に臨むのが恒例であった。⁷⁷⁾

ところが1949年、カチン人武装勢力を率いたノーセーン (Naw Seng)⁷⁸⁾ がソーブワーをクッカイまで拉致するという事件が起こった [Chao Tzang Yawngghwe 1987: 5; Elliott 1999: 210-211]。ツァオ・ホームパと一緒に拉致された妻の N. M. K. 氏の記憶では、昼間ホーにいたところを襲われ、大勢の従者 (タペー tapae) や看護師らとともに自動車でクッカイまで連れていかれ、家屋に2〜3日間拘禁されていた。食事の世話などは従者が行い、見張りの姿はなかった。ノーセーンがそこからさらにナムカム、バモー方面まで連行する計画だと知った夜に脱出した。N. M. K. 氏の言葉によればクッカイの責任者とその部下が、逃走を手助けした。森のそばまで歩くと、そこに2頭の馬が用意してあり、ソーブワーと彼女は馬で、他の人々は歩いて、ラーショーまで逃げのびたという。⁷⁹⁾ ノーセーンの目的は、ソーブワーをビルマ人 (政府) に背かせて [Chao Tzang Yawngghwe 1987: 34], 旧時のカチン人とタイ人の連合を再現する [Elliott 1999: 211] ことであった、あるいは全山地民の一斉蜂起を計画していた [Tinker 1967: 47] と書かれるが、真相は不明である。⁸⁰⁾ 帰還したソーブワーは直ちに配下のカチン人部隊を召集して反撃に出た。そして、ビルマ国軍が追撃に加わった。

ツァオ・ホームパの救出にあたったのは「忠実なカチン人」 [Elliott 1999: 211]⁸¹⁾ であった。この人物、Duwa L. S. Zau Hlat (c. 1902 ~ 71) は、その長男が著わした「小伝」 [Lahtaw Gam. c. 2000] によると、クッカイの東北12キロメートル余りに在るパタム村にクランの首長の子として生まれた。クッカイのアメリカ・バプティスト派ミッションの学校⁸²⁾ で学んだ後、ラーショーの測量学校に進み、優等の成績で卒業。測量土地登記局に上級書記として6年間勤務してから、セーンウィーへ異動となり、1930年から42年まで土地登記・税務事務所の首席書記を務めた。ツァオ・ホームパに重用され始めたのはこの時期であろう。日本軍の占領期には兵站

るまでそこにいた。クッカイのカチン人たちはソーブワーに税金を払うほか、道路工事・井戸掘り・貯水池建設などの労働奉仕をした。労役の徴発の連絡は役人を通じてあり、文書 (手漉き紙にタイ語で書かれた) の場合は役人が村に来て読み上げた。耳で聴けば、カチン人の誰もがタイ語を解した [2006年2月22日]。

77) S. K. L. 氏による。

78) Lintner [[1999]2003: 512], Chao Tzang Yawngghwe [1987: 212-213] に略歴が載る。

79) N. M. K. 氏による [2007年2月24日]。

80) Smith [1999: 140] は、反乱勢力がソーブワーたちの支援を元より期待していなかったとする。1949年2月にノーセーンがビルマ国軍のカチン人部隊を率いてカレン人の反政府運動に合流してから、翌年5月に中国領内に越境して終息するまでの蜂起の展開については Lintner [[1999]2003: 15-24, 96-109] に詳しい。これによれば、ノーセーンの部隊は1949年8月29日にラーショーを占拠した後、クッカイを経てナムカムへ向かった。記述はないが、ツァオ・ホームパの拉致はその途次の出来事と思われる。Tinker [1967: 47] は、8月27日にラーショー、8月31日〜9月8日までナムカム、その後バモーへ向かったとする。

81) S. K. L. 氏も同じ表現をする。

82) *Burma Baptist Chronicle* [1963: 376] によれば、クッカイに聖書学校が設立されたのは1933年以降で、それまでは長年、「雨季」のバイブル・クラスが開かれていた。

係だった。戦争末期から 1946 年まで、ソーブワーがミッチーナに移って不在の間、⁸³⁾ ソーブワーに代わって役人たちの職場復帰のための環境整備、市場の開設などを行った。1946 年末にソーブワーが帰還すると、Duwa Zau Hlat は徴税官に任じられた。⁸⁴⁾ そして 1947 年 2 月のパンロン会議には、他の 5 名のカチン人代表と共にバモー地区代表として出席し、協定に署名した。⁸⁵⁾ 「小伝」には、Duwa Zau Hlat が愛用のジープでパンロンへ赴いたとある。

以降の Duwa Zau Hlat の経歴について、「小伝」では明確でない点があるが、ある時期からソーブワーの財務大臣（アーコン・アマ Akon Amat）であった。⁸⁶⁾ 5～6 人の大臣の中でも、ソーブワーの財政を預かる重職を任されたのは、信頼の篤さの証と言えよう。「小伝」には、彼があたかもその地位を利用してソーブワーの許可を獲得し、（セーンウィーに）キリスト教会を建設したと記される。圧倒的多数のタイ人仏教徒社会にあって、当時僅かに 5 家族のカチン人キリスト教徒の利害の代表者でもあったのだ。やがて辺境の治安維持にもあたる。「小伝」はソーブワー拉致事件における働きを、ネーウィンに委嘱されたカレン民族防衛組織（KNDO）⁸⁷⁾ と結ぶノーセーン対策の活動の一環と見なすような記述であるが、真偽は定かではない。しかし事件への対応にあたって、自らと同じ「民族」に属し、自らの信仰するキリスト教徒を含む反乱側を相手に、当然のごとくソーブワーの保護や利益が優先されていた事実は確認できよう。

Duwa Zau Hlat はその後、州政府の財務大臣となり、⁸⁸⁾ 1959 年 4 月のタウンジーにおいて、ソーブワーたちの統治権が放棄された緊急会議の議長を務め、「封建制度の終焉とシャン州の新時代の夜明け」を目撃した。州政府にあっては、多くのタイ人やカチン人の若者たちの官僚機構入りに道をつけたこと、ラーショアの刑務所に反乱容疑で収監されていた 300 人以上の政治犯を釈放したことが特筆されている。1962 年のネーウィンのクーデター時にヤンゴンで拘束

83) Lahtaw Gam [c. 2000] は「行政を放棄 (abdicate)」したと書くが、K. T. 氏（セーンウィー在住、クンサントゥンフンの息子（1）の孫にあたる男性）によれば、村々に避難していた間に、降下した米軍のパラシュート部隊に捕らえられてミッチーナに連行され、米軍のゲストとして終戦まで滞在した [2007 年 2 月 24 日]。

84) この時期、カチン通商会社 (Kachin Trading Company) の設立 (1962 年まで無給の会長を務める) や、セーンウィー・クックアイ・ムンユー・チューコックの協同組合の組織化にも携わる。

85) [1947 Constitution. Vol. 1: 186-213]. パンロン会議は 1947 年 2 月 3 日に始まり、2 月 12 日に合意される「パンロン協定」に至る一連の会議を指す。2 月 8 日にアウンサンがパンロンに到着するまでに、タイ・カチン・チン間で独立後のビルマ暫定政権への参加に関する基本合意が成立したが、その嚆矢となる 2 月 6 日のタイ・カチン間協定にツェオ・ホームバと Duwa Zau Hlat が署名している [ibid.: 192-193]。

86) S. K. L. 氏による。氏は、Duwa Zau Hlat がきわめて正直であったのが信任の理由とする。

87) 1947 年 7 月、カレン民族連合 (KNU) の武装組織として結成、1949 年 1 月、ビルマ政府により非合法化された [Lintner [1999]2003: 10-12]。

88) Tinker [1967: 160] は独立直後の内閣についての記述のように読めるが、憲法に国務大臣を議員とする資格規定はないと注記する一方、Duwa Zau Hlat については M. P. と明記する。M. P. としての入閣であれば、早くとも 1952 年の第一回総選挙後のこととなるが、Lahtaw Gam [c. 2000] によれば、選挙に出て当選したのは 1960 年の第三回総選挙時である。

され、1965年に病気を理由に解放されたが、翌年5月まで家族共々ヤンゴンに留め置かれた。1971年1月、郷里のセーンウィーで生涯を終えると、葬儀には数千人の弔問者があったという。「小伝」は、「彼はキリスト教とカチン民族のために生きて、死んだ」と結ばれている [Lahtaw Gam c. 2000]。

Duwa Zau Hlat のもう1人の息子である Z. T. H. 氏⁸⁹⁾に、父が語ったというソーブワー拉致事件の顛末はこうだ。ソーブワーは (N. M. K. 氏への言及はない)、一味がビルマ国軍から奪ったジープでクッカイまで運ばれた。関与したのはノーセーンと手下の6～7人で、カチン人が主体だが、中国人とタイ人も混じっていた。救出は、Duwa Zau Hlat がノーセーンと会談している間に行われた。見張りの手下たちは酒を飲まされていたという。これは、ソーブワーに忠実だった父が、音に聞こえた叛徒ノーセーンと対峙したと息子に語る手柄話であったのだろうか。

Z. T. H. 氏自身の身の上話も、ソーブワーに近しかったことを物語る。氏が生まれたのは戦時中の1944年、場所はソーブワーの家族が避難していた洞窟の中だった。米軍の空襲が始まり、ホーが破壊されると、ホー内の人々は村々に別れ住み、洞窟に居住する場合もあったが、⁹⁰⁾

Z. T. H. 氏が生まれた洞窟に同居したのはソーブワーの家族と Duwa Zau Hlat 一家だけだった。他の人々は別の洞窟に住んでいたという。Duwa Zau Hlat がかくもソーブワーに近侍していた理由を、Z. T. H. 氏は、元々ソーブワーに許可されてセーンウィーに来たからであると言いい、後には親戚関係にもなっていたと説明する。親戚関係は Duwa Zau Hlat の弟の1人 (次男) の妻と、ソーブワーの妻の1人である N. M. K. 氏が姉妹であったことをいう。ちなみに弟はもう1人 (三男) いて、⁹¹⁾ ツァオ・ホムパのボディガードを務めたこともあった。そしてその妻は、クンサントゥンフンの盟友であり、クンサントゥンフンの妹を妻とし、宰相ともなった人物の孫娘である。⁹²⁾ これらの事実から、ソーブワーが一部のカチン人⁹³⁾と姻族関係に及ぶ深い絆で結ばれていたことが知られる。「民族」範疇を用いて敷衍すれば、タイ人とカチン人の混血も、ソーブワーの周囲のあちこちで生じていたのである。

89) Z. T. H. 氏はセーンウィー在住。父が Duwa Zau Hlat、母はムンヤイ出身のタイ人で、1944年セーンウィー生まれ。コンベント・スクール、タウンジーのカンボーザ・スクールを経て、ヤンゴン大学中退。現在は英語教師をしている [2007年2月20日、23日]。

90) P. K. M. 氏 (注38) 参照) による。戦争中は P. K. M. 氏の一家も、英軍人としてインドへ赴いた長兄たちを除き、セーンウィーのホーに住んでいた。

91) N. L. K. 氏 (注27) 参照) の父。

92) N. L. K. 氏による。

93) ちなみに、クッカイであるカチン女性 (クッカイ在住、1946年クッカイ生まれ) に Duwa Zau Hlat について尋ねたところ、Duwa Zau Hlat を「ウンジー (大臣)」と呼んでいたこと、父 (c. 1900～c. 80。戦中から軍人で、戦後はカチン連隊員としてシンガポール・マレーシア・イギリスへ行く。P. T. T. 氏の弟) の存命中に、選挙運動のために家に来たのを覚えているという。

むすびにかえて——セーンウィーの仏教、とりわけ「ユアン派」について

クンサントゥンフンが晩年、仏教関係の事業に熱心だったことを既に述べた。ソーブワーの仕事として、まず第一に仏塔の維持管理を挙げる人もいる。⁹⁴⁾ おわりに、セーンウィーの仏教について述べ、そこから導かれる広域比較の視角を提示したい。

現在セーンウィーには33の仏教寺院がある。町域(weng)にあるのが4寺院(ワット wat; ビルマ語起源のチョン kyong も一般に用いられる)で、そのうち最も古いカンマタン寺(Wat Kammathan)はクンサントゥンフンが建立したとされる5～6寺院⁹⁵⁾の内一つ、ホーラーン寺が焼失したため、1934年に再建されて、カンマタン寺と名を変えたものである。再建事業はソーブワーの認可の下で宰相クンコーンが遂行したが、その際クンコーンはクッカイの役人に命じて、当時セーンウィーにはいなかった瞑想修行を教えることのできる僧を探しに行かせた。⁹⁶⁾ ここから知られるのは、仏教信仰がソーブワー行政の一環に組み込まれており、またそれが単なる形式ではなく、内容にまで及んでいたことである。同じく町域の中央寺院(Wat Kang)に在るマハムニ(Maha Muni)仏像は、クンサントゥンフンが建立を開始し、ツァオ・マンパによって完成された。⁹⁷⁾ カンマタン寺の例と合わせて、クンサントゥンフンの仏教事業が後継のソーブワーによって継承されていた点も見逃せない。

クンサントゥンフンが建立したことが確実なもう一つの寺院は、やはり町域にあるセーン寺(Wat Sen)である。町の伝統医の「年誌」は、1895年の「大殿様(ツァオパー・ルン saopha lung)」によるセーン寺の建立から筆を起し、ガラスで装飾された寺であったことを示す[U Wanna n.d.]。日本軍の占領中、セーン寺は軍本部として使用されていた。空爆を受けた旧寺堂跡に、現在は柱だけが林立している。セーン寺は今日、「ユンの寺(チョン・ユン kyong yun)」と呼ばれ慣わされており、創建時から「ユン」であったと伝えられる。

「ユン」は、現代ビルマ語では「ユワン」すなわち「タイ国北部チェンマイ地方およびその地方在住の民族名」[大野徹『ビルマ(ミャンマー)語辞典』大学書林, 2000: 556]として定着しているようであるが、「ユワン(ないしユアン Yuan)」の語の起源と意味については諸説ある。シャン州地域のタイ語における「ユン(ないしヨン Yon)」について、あるタイ(シャン)語辞典は「シャン州とタイ国の間の境界地帯からの人々」[Sao Tern Moeng 1995: 271]と説明して、「ユン」が国境を跨いで分布していることを示唆する。セーンウィーにおけるユンも国境の

94) N. M. K. 氏による。

95) S. K. L. 氏, S. T. A. 氏による。

96) [POKK.], D. K. M. 氏による。

97) ツァオ・マンパは中央寺院の本堂も建立し、しばしば訪れていたという。Acinna 僧(中央寺院の僧、60歳。20歳で得度)による。

彼方の異邦人ではなく、言わば身内の存在である。町の人々はセーンウィーに在る幾つかのユン村の名を数え上げることができる。

町から約3キロメートルと最も近いユン村であるノーンカー (Nong Ka) 村を訪ねたのは、「仏像に金箔を施す祭り (poy lu kham phra; poy tok kham)」の日だった。⁹⁸⁾ 村のトゥンサーン (Tun Sang) 寺には、近隣の村々の信徒たちが集っていただけでなく、大勢の僧侶が諸方の寺から来ていた。遠方の寺の僧は、前日から泊まりがけだった。中にセーン寺の僧もおり、実はそこに集まったのは全員、ユンの寺の僧だった。彼らによれば、セーンウィーには11のユン寺院があり、⁹⁹⁾ 各ユン寺院の行事にはそうして集い、声を合わせて経を唱えるのが慣わしである。彼らを「ユアン派 (Yuan Sect)」[Sai Kham Mong 2004: 67] たらしめているのは、パーリ語經典の読み方であり [Sai Kham Mong 2001: 36-37],¹⁰⁰⁾ 經典が書かれている文字である。¹⁰¹⁾ 彼らがリック・ヨン (lik yon) と呼ぶ文字は、正しくタイ国北部からラオス、中国雲南省南部、シャン州東部の広域で用いられていたのと同じタム (Tham) 文字 [飯島 2001] である (写真8)。

シャン州北部地域への仏教の伝来に関して、当該地域には、15世紀にチェンマイからスィヒン仏像を携えた僧がセーンウィーに至ったのを始まりとする伝承がある [Sai Kham Mong 2001: 29-30; 2004: 68]。これに対して、ビルマ王朝史叙述では通例、16世紀のバインナウン王によってタイ人居住地域に仏教が導入されたと書かれる。これは「ビルマ仏教 (就中ツードムマ派)」の伝来を語っているのであって、上述の伝承が示すように、該地域には既に「ユアン派」仏教が弘通していたばかりでなく、それに遡る時代にタイ人は大乘仏教を受容していたと説くのは、サーイ・カムモン (Sai Kham Mong) 氏である [Sai Kham Mong 2004: 66-67]。その後の展開を同氏に従って大まかに述べれば、ビルマ王朝権力の浸透に伴い、ツードムマ派が優勢となって、「ユアン派」は廃れ、1815年に「最後のユアン派」の僧たちが還俗を余儀なくされた [ibid.: 70]。しかし、同氏によれば、かつての「ユアン派」の隆盛の痕跡は仏塔の様式やユアン文字写本¹⁰²⁾の形で、今日も「ユアン派」を实践するシャン州東部地域 (チェントウンの

98) 2007年2月22日。

99) 村は必ずしもユン村ではない。たとえば、ユン寺院 Wat Som Yun のあるナーソー (Na So) 村の住民はタイ (シャン) 人だと説明される。同寺の僧による [2007年2月22日]。

100) 石井 [1998: 93-94] もパーリ語の発音の違いに着目して、チェントウンにおける「クン (クーン)」と「シャン (タイ)」の仏教を「ナモータッタ系」と「ナモータッサ系」と呼び、両者が「サンカカム」を共にしない理由を説明する。ノーンカー村の寺院にはチェントウンのケーマラート・プレス (1920年頃から今世紀初頭まで、クーン文字活字印刷をしていた。[2005年2月25日]) で印刷・刊行されたクーン文字出版物も所蔵されており、ユン僧侶たちはそれも「ユン文字」とみなしている。

101) 現在はユン寺院でもリック・ヨンだけでなく、リック・タイ (所謂シャン文字) と両方を教えているという。

102) Sai Kham Mong [2004: 243-260] に、ユアン文字を使用した写本例が数多く載り、南部シャン州ノ



写真8 リック・ヨンの写本
(ノーンカー寺所蔵)

*Tham Wai Phra Cao kap Thang Tham Sut
Luang* [2007年2月筆者撮影]

クーン人) のみならず、サルウィン河以西の
シャン州北部・南部、さらにはカヤー州におい
ても認められるという [Sai Kham Mong 2001:
32-33]。

セーンウィーに限ってみると、「ユアン派」の
「最後」期とされる19世紀前半のソーブワーが
とりわけユン仏教を奨励したとされるが [*ibid.*:
31],¹⁰³⁾ 19世紀半ば以降の戦乱期の様子は知ら
れない。しかし旧王家に代わったクンサントゥ
ンフンが新たに仏教を振興した時、それが「ユ
ン」であったという証言は容易に得られる。

セーンウィーのユン寺院に集った僧侶たちは

口々に、「クンサントゥンフンが読誦したのはユンの経文だけであった」「クンサントゥンフン
は毎年10月にユン僧だけを招いて説教を聴く催しを開いた」等と語る。¹⁰⁴⁾ 彼らは、セーン
ウィーにおいて今日もなおユン仏教が生きている要因を、クンサントゥンフンに帰してい
る。¹⁰⁵⁾ クンサントゥンフンの仏教がユン仏教であった理由はきわめて明快だ。クンサントゥン
フンの出身地として言及されるターンヤン (Tangyan) 地域においてユン仏教が盛んで、クン
サントゥンフンが沙弥として出家したのはノーンカム寺というユン寺院であったという。¹⁰⁶⁾ ク
ンサントゥンフンはそこで、リック・ヨン (ヨン文字=タム文字) を習ったはずである。

ツァオ・ホームバ時代のセーンウィーの仏教に関して、町の人々が強く印象づけられている出
来事がある。

それは毎年恒例の「4の月の祭り」(3月頃)の時のことだ。この祭りでは、セーンウィー中
の仏像が中央寺院に集められて、金箔貼りが行われる。沙弥の得度式も行われ、山の方の寺院
では、祭り用に特別の小屋が建てられ、見物席も用意された。子供たちには、ポップライスで
作ったお菓子が配られる。¹⁰⁷⁾ そして忘れられないのは、僧侶たちが会して読経する声であ
る。¹⁰⁸⁾ 中央寺院からは「ナモータッター……」と「ビルマ」式に、セーン寺からは「ナモータッ

の事例、パラウン人による使用例も見られる。

103) サイー・カムモン氏が記す当該のソーブワー、「Sao Som Hso (1801-25年)」の名を管見では確認
できない。

104) 2007年2月23日、ノーンカー寺における僧たちとのインタビューによる。

105) ユン仏教の伝来自体は早く、Yana Kham PhiとYana Kham Phenという2人のチェンマイ僧
が、チェンマイから歩いて来て伝えたと言われる。

106) セーン寺の僧による [2007年2月23日]。

107) D. K. M. 氏による。

108) S. T. A. 氏による。

サー……」とユン式に、違った風に誦す合唱が同時に耳に届くのが愉快だった。¹⁰⁹⁾ そしてある年、ユン派も「ビルマ」派も、セーンウィー中の僧侶が中央寺院に集って、一斉に、それぞれの誦し方で経を唱えたという。¹¹⁰⁾ S. K. L. 氏によれば、これは1945年頃のこと、当時中央寺院の住職であったウー・アローカー (U Aloka, Eka Maha Pandita) 僧が両派の宥和を図って行った催しだった。

上述のエピソードから、20世紀半ば頃のセーンウィーではユン派と「ビルマ」派の勢力が拮抗していた状況が窺われる。クンサントゥンフン時代にはユン派の僧のみが招かれた行事であっても、ツァオ・ホームパはすべての僧侶を招請するようになったという。¹¹¹⁾ ここで「ビルマ」派と書いたのはツーダムマ派ではなく、未調査だが、シュエジン派が主であることが確かなようだ。¹¹²⁾ シュエジン派の形成は1860年代以降であるから [Ferguson 1978: 73-77; 生野 1995: 218-219], 現在のセーンウィーにおける「ビルマ」仏教はおそらく後来であり、ユン仏教が先立って、代々のソーブワー、とりわけクンサントゥンフンの後援によって深く根を下ろしていたと言えよう。ちなみに隣接するスィボーでは、1924年に始まる二代のソーブワーの仏教「改革」により、在来仏教がツーダムマ派とシュエジン派とにとって代わられている [Sai Kham Mong 2004: 70]。

セーンウィーにおける今に至る「ユアン」仏教の盛行は、今日のタイ国北部を中心としたラーンナー王国の範囲についての見方と併せて、サルウィン河を政治的および文化的境界と見なしがちな従来の認識に反省を促すものと言えよう。政治的「境界」についてはさておき (但し、近代的境界概念が存在しなかったことは言うまでもない)、文化とそれを多分に支えた宗教の広がりに関しては、この地域の出家者たちの脚力を侮れない。しかし近代諸国家の排他的境界線が走り、シャン州の大部分の地域が外国人に閉ざされている現在、私たちはサルウィン河の河畔に立つことができず、河の東側と西側の限られた地域に時を違えて、全く異なる迂回ルートをとって入り、¹¹³⁾ 彼方の河を遠望することしかできない。このような現実を前にして、シャン州を抱えるビルマ、タイを始めとする六つの近代国家の領土に跨る「タイ文化圏」¹¹⁴⁾ の

109) D. K. M. 氏による。「ナモー……」は読経の始めに唱えられる三帰依文の冒頭である。注 100) を参照。

110) D. S. K. 氏による。

111) 2007年2月23日、ノーンカー寺における僧たちとのインタビューによる。なお、セーンウィーにはタイ・ヌー寺院も1寺 (Wat Sai Khaw) ある (S. T. A. 氏による)。

112) D. S. K. 氏, D. K. M. 氏による。なお、ゾーティ派の僧侶も、セーンウィー領内で活動しており、セーンウィーのソーブワーが関心を示したという記事もある [村上 2003: 162-163]。「ビルマ」仏教諸派については、生野 [1995] を参照。ゾーティ派については、村上 [2003] が紹介するカーンカム・サーンサーム (Kankham Sangsam) 氏 (ラーンヨー在住, 76歳, モンヤーンのゾーティ寺での出家経験を有す [2003年1月4日]) の著作が詳しい。

113) ダニエルス [1998] を参照。

114) さしあたり、新谷 [1998] を参照。

歴史や文化の研究が寄与すべき一つの方法は、かかる近現代の諸境界を相対化し、その意味を問うことにあろう。サルウィン河は国境ではないが、それを越えがたい「境界」としているのは、近代諸国家の布置のなせる技である。小論が略述した、北部シャン州の小邑セーンウィーに暮らす人々が営んできた歴史の一端が指し示すのは、そうした諸境界を超えた、より広域を視野に入れた研究の必要性である。

「ユアン派」仏教がサルウィン河を越えて弘通したことは今や明らかであるが、それは政治や社会から遊離した宗教界の出来事であったわけではないだろう。クンサントゥンフンを称える『往昔のタイ（シャン）の英雄の物語』が、差し迫った死を前にしたクンサントゥンフンを次のように描くのはとりわけ興味深い——「彼はまた、思い出していた。彼がまだ若く意気盛んだった頃のことを、そして幾たび、サルウィン河を渡って行ったり来たりしたことか、と。そして何も身に起こりはしなかったのだ」[Pu Loi Tun n.d.: 22]。

文 献

I. 未刊文献

A. 個人蔵

- Lahtaw Gam (Douglas). n.d. (c. 2000) Biography of Duwa L. S. Zau Hlat. (Z. T. H. 氏所蔵) [手書きコピー, オリジナルはカナダ在住の著者所蔵; ビルマ語・英語]
- Nang Myint Yee. 1998. 「Sao Hom Hpa 略伝」(著者所蔵) [タイプ原稿・ビルマ語]
- Pein Oi Kammathan Kyaung Saingya Thi-hma-yan Akyae-alae-mya [バーンオーイ・カンマタン寺関係資料]. n.d. (2002 年以降) 3 p. (S. T. A. 氏所蔵) [mimeo・ビルマ語] [POKK. と略記]
- Pu Loi Tun, comp.; Pu Loi Hom, ed. n.d. *The Story of Shan Warriors of Old*. [Hsipaw]
- Soe Soe Aung. 1992. 「コンバウン朝時代のシャン地方統治の歴史 (1752-1885)」マンドレー大学歴史学科修士論文. (著者所蔵) [ビルマ語]
- U Kaw Kham. n.d. 「セーンウィーの歴史と文化, 仏塔, 建造物, 遺物その他に関する覚書き」(Dr. Toe Hla 氏所蔵) [手書きノート・ビルマ語]
- U Wanna. n.d. 「伝統薬書 / セーンウィー年誌」(S. T. N. 氏所蔵) [タイ (シャン) 語]
- Yasawang Sao Pha Lung Pin Sao Khun Sang Tun Hung [クンサントゥンフン王の歴史]. n.d. (John Hpa 氏所蔵) [タイ (シャン) 語] [YKSTH と略記]

B. The British Library, Oriental and India Office Library 所蔵文書 [BL. OIOL. と略記]

- Memoir by Sao Sein Nyun or 'Nancy' (b1919), daughter of the Sawbwa of South Hsenwi, one of the Northern Shan States, and later wife of Julian Dalish (b1916) Indian Police, Burma from 1937, giving an account of her home and people.* 1919-1948. [Mss Eur/C 709]
- Printed notes on the Rulers and their families of the Northern and Southern Shan States (nd. post Jan 1909) [Mss Eur/F 278/103]
- Report on the Administration of the Northern Shan States for the Year 1890-91*, Rangoon, Nov. 1891. [Mss Eur/F 278/74]
- Report by Scott, Northern Shan States to the Chief Secretary of the Government, Burma concerning the Kachin Question in North Hsenwi (2 August 1893) [Mss Eur/F 278/79]
- Report on the Administration of the Northern Shan States For the Year 1892-93* (by J. George Scott, Superintendent, Northern Shan States. Lashio: July 1893.), Rangoon, Sept. 1893. [Mss Eur/F 278/81]
- Weekly summaries of events in the Northern Shan States (Jul-Oct 1898) [Mss Eur/F 278/94]

II. 論文・著書・刊行史資料

- Burma Baptist Chronicle*. 1963. Book I, by Maung Shwe Wa; Book II, edited by Genevieve Sowards and Erville Sowards. Rangoon: Board of Publications, Burma Baptist Convention.
- Burma Weekly Bulletin*. Rangoon. [B.W.B. と略記]
- Caw Yanfa Saenwi. 2001. *Prawattisat Thai Yai*. Translated by Sompong Taitmukaen and Chatthip Natthasupha. (Cao Yanfa Saenwi. 1978. *Phun Tai Ton Klang*, edited by Nanthasing Muangnong). Chiang Mai: Silkworm Books.
- Chao Tzang Yawngnhe (alias Eugene Thaike). 1987. *The Shan of Burma: Memoirs of a Shan Exile*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Cochrane, W. W. 1915. *The Shans*, Vol. I. Rangoon: Superintendent, Government Printing Burma. (Reprint: New York: AMS Press, n.d.)
- Collis, Maurice. 1938. *Lords of the Sunset*. London: Faber and Faber Limited. (Reprint: Bangkok: AVA Publishing House, 1996)
- Conway, Susan. 2006. *The Shan: Culture, Art and Crafts*. Bangkok: River Books.
- ダニエルズ, クリスチャン. 1998. 「サルウィン河の西と東 (前編)」『歴史と地理』516: 37-48; 「サルウィン河の西と東 (後編)」『歴史と地理』518: 24-33.
- Elliott, Patricia. 1999. *The White Umbrella*. Bangkok: The Post Publishing Public Company.
- Ferguson, John P. 1978. The Quest for Legitimation by Burmese Monks and Kings: The Case of the Shwegyin Sect (19th-20th Centuries). In *Religion and Legitimation of Power in Thailand, Laos, and Burma*, edited by Bardwell L. Smith, pp. 66-86. Chambersburg PA: ANIMA Books.
- 飯島明子. 2001. 「タム文字」『言語学大辞典 別巻世界文字辞典』河野六郎・千野栄一(編), 588-592 ページ所収. 東京: 三省堂.
- 生野善應. 1995. 『ビルマ佛教——その実態と修行』東京: 大蔵出版.
- 石井米雄. 1998. 「シャン文化圏からみたタイ史像」『黄金の四角地帯——シャン文化圏の歴史・言語・民族』新谷忠彦(編), 86-99 ページ所収. 東京: 慶友社.
- Kyaw Win, U; U Mya Han; and U Thein Hlaing. 1999. *The 1947 Constitution and the Nationalities*. 2 vols. Translated by Ohn Gaing and Daw Khin Su. Yangon: Universities Historical Research Centre and Innwa Publishing House. [1947 Constitution. と略記]
- Leach, E. R. 1954. *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. Monograph on Social Anthropology/London School of Economics 44. (Reprint: London: Continuum, 2001) (エドモンド R. リーチ. 1995. 『高地ビルマの政治体系』関本照夫(訳). 東京: 弘文堂.)
- Lintner, Bertil. [1999] 2003. *Burma in Revolt: Opium and Insurgency since 1948*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Maule, Robert. 2002. British Policy Discussions on the Opium Question in the Federated Shan States, 1937-1948. *Journal of Southeast Asian Studies* 33(2): 203-224.
- 村上忠良. 2003. 「シャン仏教チョーティ派史素描——東南アジア大陸部における仏教実践の事例研究」『宮崎公立大学人文学部紀要』11(1): 155-172.
- 荻原弘明; 和田久徳; 生田 滋. 1983. 『東南アジア現代史 IV ビルマ・タイ』(世界現代史8) 山川出版社.
- Rangoon Gazette*. [RG. と略記]
- Rettie, Jackie Yang. 2001. Kokang. In *The Tai World: A Digest of Articles from the Thai-Yunnan Project Newsletter*, edited by Nicholas Tapp and Andrew Walker, pp. 267-270. The Australian National University.
- Sai Kham Mong. 2001. Buddhism and the Shans. *Myanmar Historical Research Journal* 7 (June): 27-39.
- . 2004. *The History and Development of the Shan Scripts*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Sao Saimong Mangrai. 1965. *The Shan States and the British Annexation*. Southeast Asia Program Data Paper No. 57. Ithaca: Cornell University.
- Sao Tern Moeng. 1995. *Shan-English Dictionary*. Kensington: Dunwoody Press.
- Scott, J. George; and Hardiman, J. P. 1901. *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States*. 5 vols.

- Rangoon. [GUBSS. と略記]
- 新谷忠彦. 2003. 「セーンウィー・クロニクルに見られる『タイ国』像 (1) —— 王の資格をめぐって」『アジア・アフリカ言語文化研究』66: 275-298.
- (編). 1998. 『黄金の四角地帯 —— シャン文化圏の歴史・言語・民族』東京：慶友社.
- Smith, Martin. 1999. *Burma: Insurgency and the Politics of Ethnicity*. Second (updated) edition. New York: St Martin's Press.
- Somphong Withayasakphan. 2001. *Prawattisat Thai Yai*. Bangkok: Samnakphim Sangsan.
- Theinni Myo, SPDC. 2004. *Myo Nae Saingya Akyae-alae-mya Tingpyakya*.
- Tinker, Hugh. 1967. *The Union of Burma: A Study of The First Years of Independence*. Fourth Edition. London, New York and Toronto: Oxford University Press.